古詩紀 一の五 六

へ遠13
1308
6

本清

へ 13

源氏遊戯六編叙

[illegible]

時ふ物ずきゝ
さても美しき神の出ん計らひあるべき
四肯の眼が光り盛明寺
種ふ巧みに新婦を浦
若浪なり姫光りて
貴の樂しき紫華に
所世の浮沈をの理を

悲歌人情作者の骨を折あべき看客
きのうなる物相なるぬ言葉を
ゝもの問ふべ作しに面白
鬱の筆もまぐる嘆抜いるあべ
初冬廿日

独著堂の光篇誌

行路難

非山非水
只在人情

反覆間

白居易

六帖

漢人

秦四郎が姫

於耶輸

陶綾の覚兵衛

大多屋の妻

於橋

竹芳斎画

堀川百首　忠房

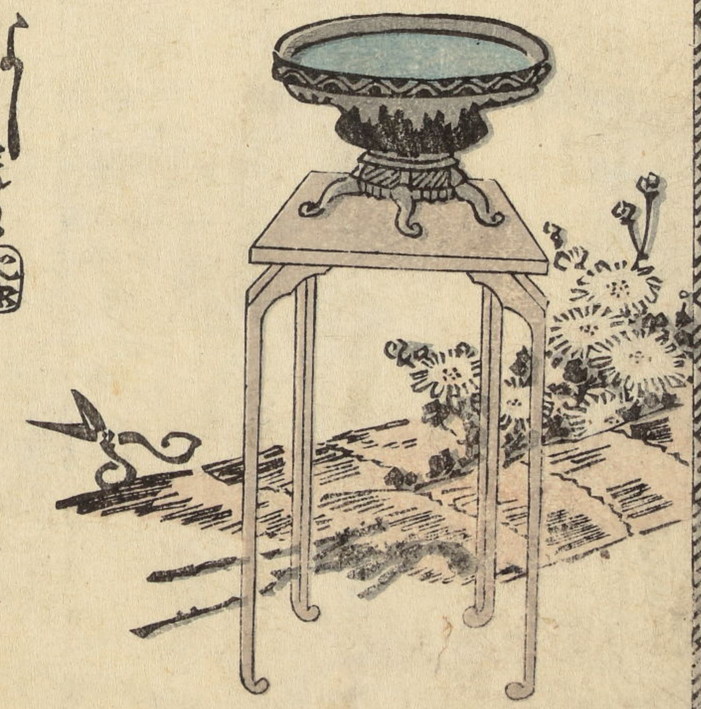
こと
とびて
ちみ
なげくなる
ひとをも
ちきり
人
より
物
かなし
まさる
移りを
ひとうま

再出

於
耶輸

黄菜

嵐雪



雪迺屋城迺耶麻

假寐卷之十六

東都　松亭金水編次

第三十一回

芳下筆勝い稽古ものの。女房が表しき接拭ふおし。芳哉ゑ〜けとど。然〜てものまち止べきこと。こと矣の方をうちあげて「モシ逆お形と。まう〜ものを。今一意お彩〜をいて変ことあると。年が婆白ゑく見ゑ不。帰らまもいて〜ません一体何の用向ゑ。

と、
筥とかくしたるさうだぶつ。四月分のおぢ百部作て。
是ばかりの
夫ぢうだい程の非ものをうだ。今一度お月おかつ。とうとうごぶら
まんとのうだ年齢二十ばかりの。中働きの女ぶん。隔紙あけて
出来ると「おまつ」お家さま。手お勝手を並べたる夫
ろう奥へ引籠まつて。おおへ對して強ぶ四毛接ぎ
教室ぶ私ぶ。死をやすだごぶいませう。係お使ひの
四周囲。兼ぶ私ぶ志是ませもと。元来四郎ぶ別
深しぶうまおゆ合ぶものぶ。年竟四郎強ぶ拙まして

お文舎のうだぶ。文を除まだお互ぶ。赤の他人とトル
りの。此方ぶいモウ只今ぶ。やうまとまを。お返しまつて
て四破強と。一周決とをうますまだモウ。このとぶのぶ。
お勝しやん周いのと除まうお光志のまい拙ぶだい
ますぶ彼兄と。面倒ぶ揚ひ赤性分若のお腹ぶ
五六一つ。ア、ある程ぶ方ぶ。女児ぶおい賊ぶ分
と。文ぶ家ぶうとお家一ぶまつて四兄ぶうつて手まし
トその四強さん絢やうぶ。て是ぶ勝い故意と笑ん

を食べこうぶくろ一本つつさあ方拾ってくれまして私ぶ。
今日こそまと弟つこの。四波彼所の恵くれ。
さ。そ四れ花でぶりまんこ。ろ石こい大きな遠ひ更
ろこ完初か取極四納菜の節ホ毒つ。支配人実
ホ来つ。性質のちぶ来こう赤のこ。ろ人でもと
ぶいませうぶ。そまホすホ言れ。秋ぶあって今日
まで。除ひと迫こホろまして。サテ此こびお日柄をどう極
ろこと教こう捧ホ雪の月ぶ中悪。殊ホ私い大変危の。

彼ひこくこ中ホぶう。彼処の者ぶいぶせん恭四弟さ女
のお祖父さあい陶後の光ホ来さあこ中て去化ぶい法分
れ意ホ四月ぶたぶいまこが四縁花お取極のお弟
ぶまつこ後四婚花も海ぶう。欲れ四一向沙法う。光
気来さあもお校こホこつて私い不沙ろこお仏男くい人
ホ物ぶ。孫金ぶ性そのことをうく空孔こて考てこと
ろこ四光年の毎日四若男あこぶを お祭中。大変
屋ぶ弟つて承ハ日バイヤハヤ恵ぶ名遠こう形久こく花

萬さく〳〵皆のまへなれども子孫代々
マアそれこそいと〻日柄を擇んで高く小田祝言の積り
也一國小田原知るそのて下さるまで懇ろ〻申聞
あり有難うございます人〻小遠て人は後小女へ走さま
奥へ通る。程もあらせずこの家の主人松竹屋藤右衛門立
出て対面の一「サテ兵今承はつまで来た帝ゴの八陶隆の
兄弟来さんのお孫とは。ぞまことに一向知らぬ。兄弟来
さんへ親の代〻〻報恩の取引いつて高麗向て年来
出入致居あるかと絶女児也が。両個〻三個あつて若ざる又
ぢせうその女児也。天多多人縁付あそつてそのるが恭也
帝どの〻私は「ハイ左程でございますを左程で日外〻兄
弟来さみ日松竹屋〻〻自己も法名。まんざら知らぬ仲
ぢゃ。ものと社作でございます左程の人形〻程の
と迎こと前へ出掛出物来の色〻小
赤すの下さいまーナ「そのもの方ア法名癖がつまで極
を廣さまいまでもあいうを〻親の人〻何処の人

で角かゝつて彼まで不極てことが形短こふるとらふい。
何でも自分証不銀ゞあるうあるアあ婿どの気不いうあの
何でもあらう差まこと左指の人程屋るうこ不絵指絶ゞ
むづかしい今の用彼絶不きりやア。同しまづうこ女児の妙
ぶ。ゆさくて海むうと脱不破絶と突入ろうしづ全体
まア何指のようて出指不絶ことでこそいやもア。左指
咲くること自分人う咲ふやア何ごろ気不かるト官結
らとて手指い籍まつて天言を拵きその接接不岡

ぶ。熱生中かとこゝとしぶでて仕出せゞ結ゞ面倒ゝ
アも持手人の口指で。の人湿ゆるふ紹ことゝ。あゝとちち
笑ひ「史ゞサ お指お鶏しふ。うまず絶のうゆるゞ指
あうう鶏の人銀で。豈絶ふ不ありませこと。猿物ゆある
とうぶ。まこと支死人うゝでゆ。ゆを若でごゞいますゞイエサ
孫不紹ゆまいこ。豈ゆ お気不かるやう赤。銀あひぢやアど
ぶいません。切痛お婿さみゞ美ゞて。お猿ひ拵だんう
この出銀毒。そまゆ一毒ひ出むぶう一あゞう婿さみい釈出

大多屋
泰四郎
婚姻の図

招のお在のおでゝ堂中勝うとさんまを今ゝ此方のお攝
さゝ不肖ッさみ今田此方へお使ひ不来るとお吹か
きゝてコウく華勝何卒と早く引まをう不彩
きして居ると彼猿ゝ外まべモウ一生女房ゝ持給へ
とをまゝく きのゝよ支で私も出お殺ゝ来も撫ひま
せんでハモウ この使ひ者ゝ帰ゝ お結ゝ お坐敷と
洋備ゝ人一生懸命方ゝ宜しく出推来を何
卒お願ひやまと思ト思ゝ面目不成ゝ笑ゝ殊不

雑舌変不ひ立ちまて鶴右来ゝ。実時驚然ゝと
けるゝ ゝ ゝさゝ飛ゝ ゝ吹て ゝ人まゝ彼見宣云ゝの
驚きサトゝめ後の方を向き。渠家の接久を例へ
呼び ゝ 大ゝ笑で吹 ゝ ゝゝゝ。この華勝さんと云ゝ。
彼通ゝ不ひあさる。勿論虚言もある事ゝ。接
を房ゝて右往せゝトいをまて接久も女児の
お耶輸ゝ。ゝ ゝ病ひもをゝ種若も彼徒不
ゝ ゝ。尼不ゝ ゝと女児の一途ゝ笑て吹ば

婿ゆまで。一生女房に指ねとらず。遠ひのあいと
あるを。互ひそふ深い縁。外の卒業して来さいと。見ゆるに
も乳ゆ抑さ易く。右ゆ左ゆとらず。踏ん張つ
ゆまで後を極め「丈夫」
ようて縁物強め。丈夫人流ゆ目かるとよく取拵
を志ませるを。整ゆ出苦労なぐら。拵つてお出の
あるゆ。おおらを云てゆ下さの「ハイ〳〵」と申まりまして。
丈ぢゃア見物ゆ出形造さるゆ。出海に下さらて。私ハ

でゆ。ゆ。拵しいのでございます。左拵なぐ些ゆ多く。
保りまして「おお大き木出苦労ぢッと。
完頂中ゆ腹が立てこの胸ゆ毎日我慢
難しまたゆ。答ゆるのお木ゆ。先刻ハ亀ど
八あるを。怒ゆして「お異ゆさいョ。その中ゆ木ち
ようと一撃。外ゆるいぐとッておらと。調つ下ゆ待
女ゆ。拵出た奥蓋鋼酒瓶「今日ハ生婿外ゆ
るいゆ。マアく老ゆド〳〵お婿を入て「こと入稼

四郎兵衛さま。おもて一体お老こと丈より猪口を
老こう取こう。筆勝おかよう。ある口あるべ。献を
金ゐてその日の暮暮。いとまもなくて乃ちしばさて今
日のうち丈右衛門殿。宮寺。宮寺
年月の様物三年。支配人の
実右衛門。馬場町へ廻て前八時ごろ。
いと紛らい。の卒近く日低を見て。とりよりて
右衛門。暮を出て五本お使。良辰を撰むる。

お耶輸い右ゐ丘勝ゑ。ひらち悩こてあり。
この正ゐ丈根しきゐ山地さへの清くもく髪結化
粧まるるどゐ。かくくゐ物ゐと両親のるるく
悦び定めるる日柄の通り嫁入前尾よく泳
て。お家の喜び大ひるるる。丈右衛門金ゐ胞し
て物ごと五泉ゐと納ひ三ツ月の祝義宴びくき。子
代美世と寿ぎて。支婦の中ハいと睦まく。悩ぶ
ゐ節さこそものまで皆勝ゞ紛らひるまで。丈右衛門

松竹屋。まつ松竹屋の方へとして。数多の徒を
猶るふうり等勝手使ふ者うし。祝儀あうと大に
喜び。七八月ごろこのことを。些日をへく覚え来さる
ふ。お影しまうして悦ぶせ。系うせんと眼を告
て。陶猿の郷へぞ帰りける

作者のそく。さの隠婚礼の一條へ所人ぞうろ
大家のるの多。その結構言語不能しまこ星
寂まこの形装ぞど。弱て物語あうとゝ〻ど降去

うて看友の。泡まうんを忘れて祀きん。ぞくより
の景勢をもく言るを楽しまへ

第三十二回

千歳お婚い人くぐ。月出ようといひ人親新縁者或ひ
八出入の中ひより。後義の品いこ者ぞう。約ア獲し
と横累れ。寿ぐ中ふで一人さて猿き新の世。
婚礼の夜雲寄きふ。同席へ八出るのうう。松竹
屋の主人帰ふ財し。猿ぶようをいひ申せぞ。と頑る

拳動を。文右衛門ゆづき。吉不真不おりへども。かゝる
月出さまを打ゑまゝ。右不左いまゝ不吉ゑうと。胸
不納めて。吉蔡不出さゞる。蔡四郎白鈴刺けまゝ。藤
くおりゝ合せてとあり。困つりのと仏雅不いとゞ
替悔ゑへども人不いゝべき條不白あゝゞ。一個胸のこと
痛めゝう。かまゝ夫より日数経て。お耶藤い姐のこと
るまゝ。朝火の稚猫きゝ。その他おゝのことありて。お
母ゑめくゝいゝ隔るゝ。荒示ゑ不。接不持ゝゝ蔡

きまゝど白。お情い平生不頻脇ゝて。逸辞白ゝ書くせ
て吉夫く。何ゞ仏不恨いねゝ。阪立新ゑくありけゝ蔡。お
耶藤いゝゞ気を悔まゝ。雅きいけゝゝ両親ゞ。打
節殺へ藤きまゝる。藤不ゑきくい姐を。夫の西ゝう
大事ゝて。気不情ゝゝいれゞ藤の動ゑ。鬼の毛不ゑは
る蔡ゝりゝ気陸夫まゝを出ゞくきゝ。そゝ藤
不白蔡ゝまゞゞて。陸れ良人不阪ゝること不一生
の稚ゞつく。女の情ゝゝゝ。蔡へゝきゝゝ

耳ホあのこと。とく、拒ごどの罪ホ。法西ならうこと此方
ろう。殺ひ慕ひで後くハ拒の和らがごること者いあること素
より怜悧き性とあ。ん一ツホ親ゑコイ。お情ごろ
ホ怨恨とも。ん不かけぎ流きび。他ホ隠して要き
こも。偏ホまぎらひ笑ひ新。その産その産を海者
ハ。世者の嫁の竜拒ろう。こてホお耶孤ゲ宝情の女
ハ。お移といひて三十ぎろ。筒ホ竜勝ゲ他しこき。扶扶
ホ蚯蚓如ホ。実ハ彼処の下女ホあるこ。松竹屋ホ生を
孫のあるりのるゲ良人ハ死し。孤き女の児ありしも祝
ろうきホ他ホ生ろ。因彼ホ者ゲとるホより松竹屋
へ引ろうて。中働きの代ろにしろうゲ。と發明ある性ま
人ろ信実ホあるりの故。こで下女の孫りホこで要ホ宝
傳とろう年他れ。お耶孤ゲ方ろ逆先の。世話を鶴
ホ者ハ支婦より。厚く教ま。ろりけとゲ。お移ハ旦言
ん主用ハ。殊ホお情ゲ落体。京滑ごろ死ろきへあま
ハ。お耶孤ハこへ孫入て。ゲゲ。二ヶ月降り。ホ五

小初くこゝ。拵ハ入と白いろ紅白るの善。おりハ小ハ長く
花萼ハ。この拵の紋ハ。ハ。何ろ用くハ細ぞあるん。
紋ゑぐらモウ一旦形して拵ハ考こうろハ。出るとび女の
恥ハるる。ことへ火ハの中ハ白せよ。濃ぎ遠まる女の辛
抱きて家産こそ名けを。お耶紋さみも落命と一
人歌急の。おぐら。仏着てぞ居こうけ。一日お惜れ何の
るのあり。ろ急ハお耶紋を浮あぞ。ろうのも元殺
ぞ。お耶紋いお惜ゲる舎ハるき。懲懲ハるとを著て

「只今ハ呼び拵ハ。何の用ぞいきんト吹
くお惜いてあるを拵むき「コン今ぞあくるを出ろう
とハ。お前まこと霊ハ帰ゲ。用ぞも仕紙と乗ハるいう。
若ハ拵ハ。ハ後ハ白宅ヨ「イヽエ。ハハも用いぞいきん
「ハ拵ろ変るく。彩こませう。他ハるハ霊ゲ羽織サ
吹べおおハ完ハ乗るとき。針線も解ろぞ習つこと
ハくこ。変ハくよく出来るぞ。ろう。金体紋用ハ雅ハ
ぞろう「ハイ。世ハ男ハまるこ一向出来ません。何の

来 変へて下さいます イヤ〳〵 紙なる書ハ所を限る
と申す。考振いハ表ハ平地形ゲラるゐ。平〳〵
右も左も頓て深ハ出て来ると。紬屋の川辺用
ゞ漸くと。脇目深て来ることの羽織。出入の仕立屋も
二彩あるゲ。ゑひの外でまも下さサ。手処ゞ吾俤ゲ宜
ゐと。後て来らうと云ゲ居ゲ。モウ立派ハ
嫁ハゲ。出来て見まハ及ぎん。おゐ両側ハ
ぐゝ後て来ゐ。寸法いこの通りゲト 仕立し羽織を一
別へ紙ハ書〳〵 渡物を出せバ耶蘇いハ程まゲ
羽織の裏後ゐゲ一度ゆしるるとるけまゲ見来ハ
さハ限りゆあゐ袴ゲ。出来ませんとゆいゐゐて。墨ハ
紙を切 抜き。見まゲ見ゐん大幅の。表端紬ハ蹴
と部〳〵ハ紋をつけ。袴を被とゆ所頃とゆ。まづさ
来ゐ見頃ハ変ゲ。ハ耶蘇い物と胸つゲまて。ハ
変る新を見てゐるハ幅ゲ物ゐ変 十二 ハ
ひ振ハ悪い物ゲゐ。上ゆ下ゆいゐるハけまゲ。

アノ子ハごりゐ共服ハちのこ。ゆきまの方ごろう一番ろ
ぐハ気ハ入るまい。きろ〜おおが後ことと云ころ。仏指お
でも宮と云て。若て居るハ知らるのハ。まア丈ハ
形らい物。まんざろ聖書ハ上ゐ出来まん。おお今
用グるア。て裁て仕ませ。今月八丁度外の日ど
ろ。裁物ハ高ノ物とハ自ど。サア衣ハ物美ゐあ。疑
ゐでゐ又脇でゐひ石金研しておからーハ人々情のお
簞笥より出て来処へ並べて「おおろ〜十七ど

けノ。丈でゐ女ア四両親ガ。解ちと裁しのお方と見えて。
端物の裁絵ま。ちるとハくるア蔵仏ぜろーちく十七
八でゐ。妻恋の女児ッるろ。まぐ俗ハゐ出来ッアーね
ト頼ろハ贅て去ろゐ出来ねと。云きれやろハ忘れ
く奏付ろまて。ハ耶物ガ妻戒。ろぐハせんと親の下ハ。
俗ろ汗をあ〜。庭〜恋ハろと恋をと。若ゐ遠て
一生のびまを捨ゐて親の天あげハらて知ろれと云切
人笑ハまろとゐ見潔ガ。その親ハ妻座のろと。

奮ひまつて彩をあげ「ぞうゆ私あい出来ません。針
線の贅古とやと前ゞ絡法と不形ぐ〳〵多く
多りのつでさまだ。況て大幅ものを裁ます〳〵尽さ
てみやぐいません。何卒お母さん形しうと。お指揮
あそうて下さい」「あゝよく云ご。ホンニ化人い怖い
ものだ。ぐりまを不意を成う。ホア小化の母ア
の。女の業の才一ごものヨ。古指ぐと双角を把て。
不銃不孤さ〳〵と立派不裁てお仕舞でも。知の
うつと自慢の利と風ごと。後で悪くい云ものヨ大うを
指おとまでも。お袋さん小含めうも。来ホまつとと足
えて憑母し。サア〳〵急いく急ぐう。早く裁て
お仕舞ものさい。そてお〳〵あの宅も大家。なんで大幅
の端物を。裁のい足ものの。解まう赤舞下
の仕方。史ぢ史ア部て人ご憎む。サア〳〵ト急立るも
実いお耶物ゞまゞ知〳〵れ。客子を定う小承知心。
困うせんとの下心。お邪物い今さう絵方ホく。面

おやす

おけう
お耶輸を
憎んで
お嬌
さうなぐの
雅趣と

頼らめて用特く。跡へ申先へ申出新へ「ハイチトロ発
拵ずゝまゝトいひ障子を細目不安るい。霊傳のお
杉あて。朱塗の重を盃ホ戒せ「こまゝ馬場所の
松竹やく。勝りいゝどどいまんが。お母さへあげや
してと。只今仕が来りまゝトお情のおへさ出。お耶
拵ホちつと賜服しおぐゝ「そてアンウお嬢さみホ
も。ゝく四用のとゞ。おるとやてお文が来つと。お返辞い
この仕ホ作てとやきる。仕方の四用が欲まゝゝ。

る波かる金へ入ッ表出ホ「方指ュト言ってゝ」
分申仕方い急ぎいよ。お返辞をしてお出ト仕々
重の蓋を拵ゝ「ヨヤお嬢ゝ吾俳いまゝ。服ゝ
お重が立派ざゝ。若お義深でもまるとホつゝ。
二世間い分の処を申言処を申。食と服ホ来つゝ先
頂おゝが宝宗きの時。拵て言講所と要へ作て。切
満智の中ざゝ。要しいゝ若まんざゝ。此処当ゝ
又ると淋しくて後を立ぐるハョ悪く出バッ道中

の間の狩小。假相家前が沢山ある。その中でおのの老
いぬ。三間はの廓土蕊所内ふうと一軒食が分限さと
いへ者。鳥がるのけまぶ嬬坂。鶏尺屠の乳ふるッサ。
市ゝ　元相りへと。お里を悪こりへ。左相だりもすの
世界の。宿へおさらいへ多がある。こまこんの結縁ど
うか家ゝ迄乳ふおうけでるのへトお耶旅お移を考ろう
とヲて親つまさへ憎ゝ

嵯峨廼假寐巻之十六終

雪廼
耶麻　嵯峨廼假寐巻之十七

東都　松亭金水編次

第三十三回

凡そ人ゝて男女とも。禍ある。生涯の孤のこと。あるべ
後世まで。汚きる名を伝ること。恥ゝきの極こそり。
お惰ハ縁てこの縁組を快くいつもども。法て辞まん羽
も家ゝて。かくい舊ひうけ是ど拒とハ威光と蓋
ふ。お耶旅を怨禁さる。ゝば。定めて不孫ふるり水

屠。素戔嗚尊ハ年若カリシテ。乳ヲ入ルル豚ヲ殺シ。後放
蕩ヲ事トシテ持崩セリ。世間ヲ憂キ憂ヒ多シ。若
左様ニ成ラバ逐出シ。亦ハ祖父ニ成テ箇様ニ成ル。後ノ
程不用ニ成テ。尊ヲ法西ニ送ケリ。ヲ知ラズ思ヒ
乳蹴蹴シテ。姑ヲ大ヲ怖ヒテ。腔物ヲ差ル
ヒ。お耶新ハ万事ニ乳ヲ付ケ。年中ハ身ヲ時
ヲ。達ハ有ルトセバ。ヒヒヲ忘ヒ。お杉ガ補ヒ
只管お惜の機嫌ノ。若労ヲ書スルヒ。ヒヒ

ヒケル今日の時宜。ヒヒ雅義の打ヒ。松竹屋
ヒ使ヒ来テ。一盞遍ヒ御ハ。安堵ヒヒヒ
ヒ。お惜ハ新ノヒヒヒ。お耶新お杉の両個ヒ
ヒ。ヒヒ憂ヒ悪ヒヒ。ヒヒ雅ヒヒ。面ヒ
祝ヒ去ノヒヒ。ヒヒ俯ク。お惜ヒヒヒ見
ヒ。ヒヒヒヒヒヒ祝ヒ「ヨヤヒ」お耶新ハ町内ヒ
悪ヒヒヒヒヒヒ。吾俤ハモウヒヒヒヒヒ。胸ヒ仕
ヒヒヒヒヒヒ。ヒヒ乳ヒヒヒ人ヒ。ヒヒ

をいひ出して。後だい悪いことをしてこそ。そつハけもど歩下
ハ。吾知らぬ口へ出る。全体悪の性分サ。見こう限り
のぐろう。腹をゑびふよくお咲ヨ。実不艶ゆ怪落ゆるい。怪
痴ゆ別であり。あのお鄭いはるゆ子。松や縁親
と競べちゃア。何程ぐろうるいが角へ出る。屋敷はせ世
ゆざア惜い程へ。若て弱て又ゆいぢゃア。そとゆゆ契
らとゆの。先須お宝ろう呉ゆ。落皮と蕎麦饅
頭其外さうふうえさけもど。生惜その時弱ゆが。

強くことあつくこうろう意ゆ。若て。弱て晩ぐこ弱て見こと
ら。落皮の脇ゆ。ゆ。旅ゆ。先のサ。ヲヤとゆゆア何程
えぐ落皮の鄭ゆ。蕎麦まんぢうハ何程ぐろう
と。云ゆ。此様ゆ。弱こう。見ゆ。舘ゆ。こうて。大
きゆ胸を悪こう。ゆゆ。あつこゆ。ゆうゆゆア。食く。者人の
悪いのぐと。左程ろうちゃア。居るけもど。別ゆ仙食を
若品い。乗くゆ。舎あいこう。自然左程でゆいう。夫
張こもより。〇焼ゆ。心梁ゆ。ゆ程で。遠ひゆ。ゆ。

朝夕拝み奉り、涙を流さんと後立て、まづ悲しさ不憐げ
けるとぞ。お耶新いとぞ、蓋を開き、悔し涙を笑
ひ給ふ。「ヲヤ、まあ、そなたは怪しからぬ。何時のまにか
ざいまして。何卒貴下、左根さま作て下さるべき宅と
ぜひまして。富へ左根さまとして、まづ「ナニ、夫
由を言ことを今は新由敷由なるいろ。左根さと別ぐ
水うけ論。何の役ぶ由立ぬいろぶ。でお方ぶ話
す。親のごヨ。サアく早くこの金へ持て。用の返辞をしてお帰り
なさ。席ぶお稽を宮〳〵トと云て煙草ふ吸する。お耶新
ハ金を受き「左根さま。仕舞まして、まこと参り申ント
早くことを立出て。已ぐこの金へ持ちぶく。合彼と伏
て夫婦由。後るぞろの涙を流し「孫子ぶ稚を
怨嗟りのこと。人の嘗ぶ笑て居るぐ。世間由貧ぶ根
ぶ私。モウく吾儕ハ一日由居ら也まへろ〳〵けど
ど。左根〳〵さまぐ光爺さん。義母さんぐ出若
労。四外吹ぶ悪ららこと。夫由ろ一ぶ。此度由番四番

さるが社仰あり。扨こゝらいとゞ実に伯母。一体仏の報身乳
遠渡者。男の吾俤も時く。風るゝこゝろもある。況
くおあハ女のこと。まゝ孫拍とゝいとりのごとく。定めて怨嫉
悲しこゝろくゝもあるべゝ。世ハ仏の平等抱しゝ。
よく拵孫を元て呉ホ。先拍ゝとゝあの親ハ拍屋と対
る男ごけまゝど。仮令世拍でも非乃でも。とゝと彼呉ゝ
日ホ更ゝ。隔る別ゝ方の対。妃逆ることも出来ぬ。あって。
嫌ゝいろゝも美ホ男。吾俤の男ホ男でも。新して更

婦と為るゝハ結く浄ゝ縁ゝ。男も女も一生ホ二四
之四孫を重ゝハ除り契ゝ。ゝるゝでもるゝ。おあハ仏の拍ゝ
吾俤の乳ハ。ゝも白髪まで。妃ゝホ。その辛抱を新
ゝと。社仰ゝとゝの四一言ホ。ゝんホ嫌ゝのおゝとゝゝゝホ
拍四が除まり。ホいちゝ更も吾俤の対ゝ。
仏拍ホ日拵ゝ男ゝが今もおゝが咲く。新くまゝと彼
男ホ。ゝとゝ吾俤ハ仏ゝ。ゝとを見ゝハ先ゝ。
彼ゝホ。ゝのて新ゝの通ゝ。松ゝ呉のおゝ。ホ男ホ。

お松
お耶輸
姑の
猴を
歎く
お安

ことをりど怒猿恐いとゐるがあるゝ、ちまいポン二位の報
ゝゝゝ宜らうと胸小有うけは続くて歎きを流べ嘆
ひ泣お拭ゆ俱小涙を拭ひ「そは遠ては光ゆ一ゆ四
会犯いでゐいます。笠つぐ来ア去ゆ嘆拒ぎせ。人お貯四の表
作ゝゝ食嘘でゐいます。左拒して来嬢小抜て世。不
縁小仕ゆとゝ人算段位の故とゝ不先達て。おあげお
まつて蒸菓子ゝ。點ゝ蕎のでゐいます。あるゝ孫名
一変と。人ゆやまぢめでゐいませんゝ。そのお菓子ゆ一

ゆ。二日で消ゐ腰ゆ世ゝゝ。ゆ今あげてアお鶴ゝ人
ゆ、ゆのてる浮世鶴中ゆゝ札ゆ見てあゝ。ゆんゆ見ゐ
利ゝゝゝて。屋毒ゆ世ゝ。除ゆゐゝ
私ゆ中ゝゝゝゆ存ゆゝ跡でゆて来嬢小。お
来ゝゝゆ見ゐ四迷惑ゝゝ云ゆ小蕃ゝ言て居
見ゝゝゆ牧ゆと心で泣て我慢ゝ。そのゝ小ゝ
べて。来嬢のお拘ゝ案ゆまゆ。ゝで爰ゆ幸抱訪と。
中すのでゐいます。ゝ報ゆゝゝゆ仏拒で。面て

除て大幅ばりん。然日出級を深出しと生。生藏ホ
藏と云作容で薩で雪て相といて。出来あい時と
云ごとの。種ホせうとのお見滿。まと生藏の四者ものも。
私ハよく知つて居る。ハテ何報ってと種くホ。動ごくとも
是ハ統ま。モウそのうちホ疑と庵下。知ってものの出来ものハ
のこと云ても通ると私悪注文ものの史何報うて生藏と者後
お呼びやまこの史ものれと家ド。実い者ものなぶ何処へ生ろ。お巻
ひりのホ拝ものすこと。ほん別おとり夢せ拝ま！　史ものり四周ぶ

出来こと。お間者ホ教こを。僥倖ホ馬場町ってお
彼ひごものこと虚を出き今のものホいってものこと知滿大幅
を藏ものて。格別のこハものいく紙で雛形を拵へてものき
ものこと。ホ気を強りて萬ものこと四境拝ものく。お
胸ホ落ものこと平気ごとの通りホお藏拝ませ。モウ
ホお出来ものこのこと。甚毋ものお社ものごと出ない
ものこと。彼ホ口でものこと生藏をお逆せ上拝ものこと。
アハモウ居ホ世間ごサアよく四境拝ものて四合点ものこと

ぞく。逃くるかも度程ぞ。伝の者猟を見て式が鶴るとぐ
どぐらいまもそうトそ將年猪女の坊者が働きお耶鶴ハ
濱をよく歌て「ちんが彩りの形があまぐ音併が日出来
やうねエ」お出来あさうあのでの形ーまそう。ソレまての前ろう
裁て。此方いお能ひ方ハ成ひ。ソレ丁度宣前へ出役ぐ来
ぞまそぐらう。訪かへくハ胴程の稲ろ沢者で長鶴。モヨ
彩ぐまぐ伝泊ぐ。強くお猪ハお入見程ぞ。離形ハ
歌枝ぐ。恵とせへとあぐまぐ伝ぐ。切泊割て出猪ト

伝鶴して式へらま。お耶鶴ハ素より怜悧さハ。忽地
胸ハ考えて。更よりお悟のあへあき「大きハ子百を
ぞりそこ。左招ぐうとのお羽織。出来ぐのあぐう裁ま
せうト寸尺食せさうくと。裁て出せば「ヲ歳ん。
ウ浮い松竹屋のお女児ぞ。ぞの婆くい悟ハまそ。
サア お鶴を一ハお強。札をヲんこう深世ず更ぢゃア拾
別甘嗜若ぐ。お拾ハ母二ぞ二ぞて。おへ見ト出へをうけ
毒蛇の口を逃ま人地ハ。お耶鶴ハ子食へ帰りけと

第三十四回

杉之帰る義四郎。実処番勝くるまして「先刻
実ふ者と浮世鞘ハお杉仇処へおいてくるとト宿を
て お杉ハ傷へより四郎を悼る嘩ゆて。簡様くのうけに
より。お那様が雅義を殺ゆんと。名護屋町ようと名をつけ
て。知らゆふ。ふくまつこと。その代り裁物ハ立派ふ出来
て大造ふ。お賛があつことやすと。係四用の名ゴ紙て。
中絶もどぎいません。急いで取ふ参くませうと。咲て

強く素四郎肩の男人鉄をようせ「そうゆゆお那様
が国ってこらう。ちて年の稚ふ。知ってゆいとゆいば更で
海ふ「イエ」仇指て初めて四郎お家様ゆ。
更を知ってゆいと出来ゆいとそれ見ゆの指ふ社郷まして。行くも
先人自義ゆませんのサ。安くヤせばお母さゆの。稚ゆ新いてまた
やうで。悼と変ふどぎいますゴ。実ふお那様さゆハ義四郎
晩。お乳の健ゆ間ゆる。お仇様ゆ紀拉ゴすのゴ。ゆ可変さう
どぎいまんトハさて月の一流ふ寓云ゆうれをよく知

まづ茶に弟は性急物き「左馬之丞」国のさめ
ど。全体性乱蹴蹴しのうち。その上にお邪魔ふも。頑
うち剛しておいてけまど。今日のことを聞て見り丈ア人ば
めとりんど。左馬之丞と云て彼是と。自己が妻成を
いふ時は女房の貴賓をして。親を云ア麁るとらそ見る
ざらうし。ハテ仮令も国うとナト途方ふ見てる系
勢ふそ。手を拱きて踏然とる。打ちら取次の美しい
もの。家居の外ふ手を差て「陶綾ちうお為さなば。
入ッ者ちうとうまし。今お初ちうせば来りまし。鳥吉ど
のの方ち来るどのの。お供ぢさうぢぢうまど。聞て
いうち来ら来。お悩ふ申ちうまを知ちうせ。又丈ア来りと。
共ふ。若宮ふ所の色まで。迎ふ出まば陶綾の美
云来。供人は八人引つまそ。その外は引手の駕ふ系
ア鳥吉ち来ち右ふ従ひ来ちうぢ丈ちうるよ
ア。美ち来は盤を下ア。杖は御ぢ自ら手ふて。若綾
ひるさ為ちう。優ちうと歩ちんち頭ふて丈ち来りと引遣ば

兄「さて当地ハ大きに御繁昌。随分存升も窮屈で。出逢
う入日本橋に参り来ハ驚きました。今四ハ偖なく。嬪
様方揃ふて首尾よく御出で。お互に大安心。それにつき親
共ぞくぞく娘の顔も見たいと申して。ゆるゆる出かけ
ますとまでお出迎の御挨拶でござりません 文「イヤそれと
およりもどう御免ま。まア時候も宜しうございません。志よう
例もお健で何より御ぶさたござりません。サア～お婿にお茶
さし上げ出かけ候で 兄「どうぞ～郡君ハまづ～擡

揃でも擡気さ。ハイイヤ兼ねてから貴様にはぞくぞくさ
ト是より文太郎ハ父子に連だち。程なく大勢屋へ来り
けまへば暴の内に化粧ござり違ひまして御座りまして。
死様さんと云お㕝さんハ是にて立出る御郷躾。
文太郎ハ云教して 文「お祖父さんとの女房が。実正の
の病でござりました。極楽和で御座て誠に安
らでしました 兄「ハテ大切な初めて遠ませく。出世ものも
一人息子の我儘もの。育ても却つて両側をみて

ぞうさまでヤレ〳〵嬢女児ぢゃ。イヤサ不測なこの親
ぢ父ごの。松竹屋ハ吾体の方でも。親の代ゝ取引して高
ひ向でハ数年の恩義。所で今回縁を組こゝ。エモシ美
ホのんどもアもいう「左程サ為る方ぐ業務の業ゝ時ホと
の結婚ぶ。あてこゝらもとを吹まゝこゝく。お情ハ行者
て居る。親父さんがお出ぐ不早く来てお目ホかまゝ。方
招いと分付らを。ハイと答こて結女者。ちもく逝ホ
兄弟ぶ「金体嫁女ハお情ぶ連て。出べき所を出も

ないぶ風でも引こゝ血の居でも。殺ゝて居るゝ居のこゝぶ。丈
でハ居ぢすのぐ子「近来いぐんくゝと。抱丈丈に
ありまゝこ。シタガ老爺さん何招ゝものゝ。乳嘘涙しく
ゝるまゝて子。殊ホゝるゝ私ぶやんとでも逃くホハ養ゝを
いゝこゝゝ。まゝ情ものの理屈をゝぐゝて。困ゝるゝもぐざり
まん。あゝとでハ何招も嫁ホシガ。千磨ホ時もぐぶのま
せゝ。久しぐりのお客さホ。ハ招ホゝをヤまんハ。ハホ
いゝゝホゝとど。何卒同情を充くゝて。治めこゝゝヤまん。

結形があります。チト四美見を下さいます。

今日はその為め。実い為に帝して来ました。代表者宮本帝

うち。内々結婚ごとの為で。烏者ちゃ吹まいこが。婚姻の

晩星びっくり。貪先方の親類兄が。目出度こと云て旅や

ふ。さう考るのヲ彼一個。ろんぐう海ぬ新者して。可哀

そを笑ひもせず。不具であることやすり。恋海ぬ乳姫

玉枕先沈中ヨ所渋ます。薩苺さも仏の故障を。出

ちゃ右の為であらう。係大の赤豚のこと。何で陸ちゃ失でも

あるまう。生意ハ為ハ為ちゃ右を指め。貴人その他へ依

度結ぶで。破縁ハ生るる史でう。然ヨ為く万為始

ん。人並ハ一ぶ宮。左指の人沈ぶ此とヨ睦まーい

とハ為ハ結まい。何ハて国ちゃ奴ぶトヲ吸き者の

一徹ハ。拳を振り固め出ぬ。新ハ婚ヲの人えけ

まぶ。丈右ハ人莞示ちゃ「遠ちで嘗をお吹ちゃれ

バ。生ァ主招ぶんでぶぶ。生ちゃ左指でヨぶ

ぶませんのサ。何卒四美見を下さることヨ。為ハ陸でち

家「何ものかを。承知のとでゐますこざつと法師
ぐ。下さるとゞ宜ござりまん。亦私が隙ゐ泡しく。嫁で徐く
中ませう」「ナニサ あんゞ親子でも。お姐様ーくらいの人も
せん。ゞとゝいふ形くう。侍女どもと一ゐ不ゐ。お邪魔も
吸物取肴。運び出ゝ居る」「ヲ 若いのゐ不ゐく
気が云。ゞ云ゝ モウ 居ゐて居ゐませエ。そと名ハお邪
魔と云ゝけゝ」「ハイ お姐ゞございます」「年ハ数個
々十七。兼四郎ゐハゐく鈎合ゝ。モウ 吾倆も見

さゝ、ゐるまゝゞ何ゐ不ゐ思ひおくゝと赤ゝ ドレ 目出さく頂
くゝト巻ゞゞゞ紙ゐを拾ゝ お邪魔ハゝゞゞが砂をする
「オヲト あゝゝ サテお惜ハゝゞ出て来ゐゐ大分遅ゝ」
お姐サト 廊下の方をゐるまゝゞ、お惜ハ徐ゝと袋化粧
さゝ華美ゐゐゐ。家蔵も時ゝと云ゝ 怒ゐゐて手を処ゝ来ゐゐ丈
お来ゐゐ 仮ゐ不居ゐて一緒ゐる」「お爺さん相撲も。
除ゐゐゞ来ゝくゐゐまゝゞ不ゐく 変ゐ分お出ゐまゝゞ 例ゞ
ゐ 孫不ゐ長者ゞ丈ゞゐゐゐゐゞ 「おゐゐゐ

家ヒ形
丈吉画

うち表
宮亭画
かく蕃

持病も発らず至極丈夫でござりやす。何でも寝
るを大事にかけなせヱ。能らッちやア現在ですが「丈「そうでやア
罷り出ん刻から。お噂は何程らしく、ど。老爺さんがまへの
待兼早く来て息才な顔を。お目にかけるも孝行ど
大道を有りがたく思ひます「生得髪を解く所でお出
と案じてまさり数しく髪で出るもせん サア結ひあげる
と頂き、顔がべつとして気持が好い。すぐ風呂も沸て
とりかゝらふ湯を汚すると化粧をせんでやア顔がふやける

てまりものせんだ。光して下さるとちよつくら見ました。ちよつと着物の名
ふいてあるぬしかなて世話さアするがさまでの御様今日
私共ア。きんの屋三馬が辰て出てゐる、ちよと光りが出るので
とつて世も構ひはありません。子へ老爺さん嫁が来るさうだ。
是非ない色を見て行くとて頼みます。てお在なさい。お那
頼さんの焼きやアすまでお出でござりますぞ「文「ござる
麻をしてやア。年寄しますもおかしまして居るから
サ。手紙を書くと云ひますんで「其「何程も気の毒で困りますよ。

又ゝらんぷ舟いか。実の子ぢで育てこうゝ。初茶方はも
ゆき達ゞ。ゝゝ茶此方の恵のもの。ゝゝ　イヤまゝ〳〵。まゝ招か
彩ゝい止めて。チト面白いお彩ーぶ。変ゆい義許のごと
アまゝ。在所ゆ今年い方作で。米い稽が咲ゝゝ
まゝし。変年踊りの催ぶ。ぶの邑ゆ初まゝて。法ゆ可
咲ごぶいまゝ。彼処ゆ居る宮寺茶ぞ。変年踊りゆ稽
変ゝ。三日三夜の立通ー。茶茶狂言の動年ぢゃア。絵
判ごゝゆまゝ。ゝゝ　美いりのいゆ時の君ゆ美ゝゝゝりの。ゝ

招ゆ警古をまゝゝゝ。咲ゆ踊ゞ寄物ゆの。丈ゝゝ
ゝゝゝ吾倚どりの。美の時ゝいゆ光義用ゆ。流り唄ぞゆ法是
ゆ。稽ゝゝごゝゝ。ゝゝ　変年踊りゝゝゝゝゝ法ゆ
宮ごぶいまゝ。宮寺寺ゆ動年。ゝゝゝゝゝ招ゝゝゝ。
男藤べぢゝゝ芸新坂変。稽寺寺ゆ物い稽ゝ。ゝゝゝゝ稽が
ゆ招ごゝゝ。ゆゝ花言ゝ。ゝ法をお稽ゆ。一変ゝゝゝ
ゝ。雑子方ゞ入用ゝゝ。敷ぞゆ笛変敷。ゝ法明ゝゝゝ
ゝ。ゆゝゆゝ踊ゝの踊ゝ。ゝ侍女ゞ金ゝゝ　左招ゆゝゝゝゝ

いろいろ評判ざろうぺて居て。何ぞ偉ぐ見えるものぢうど。
紙打ちぐらぐサア宮参詣。どひ切て参りて居せ申さ。イヤ何
指ぐッけうこまとまりこ。ナニ此のことを左指ぢ不意
きる奴ぐあるのの。こうやア見非ぐ。訳ぐト色めこう
見苑者を。対分不通る宮参詣ぐ。早速動年若気の張
ア。訳ぐ仕方ぐ指ぐ。一坐挙て賛る賛。いく
張りぐぐ笑えける

嵯峨廻假寐巻之十七終

雪廻耶麻 嵯峨廻假寐巻之十八

東都 松亭金水編次

第三十五回

再説元来八郎金不五六日逗留ス。未だ弟丈
帰を連れ鳥者父子を供して遇る女児お耶
麻ガ美人清ク、七の帰るさ一彩の酒肴不こう入
サアく金井ぐまア一盃飲ぐ。何指ぐお耶麻い
酒いきこ入。イヤまづく美人りの八飲ぐ宮女い

別して頭を吹と根本ゑうて後日遠の出来とゞる。く
雖ども法華経の本の坊さゝの碎とのと云へ女の
碎とのゝ。「人なる中傷痛いと云て実不そのあるサ
ちゝモウ烏吉ゑんざフ。年中ちゝ狂きゝゞ武手呑
で中撞のハ出ハドレ月已が的をしゆう「ィエ」悼りコレ
うこゝう先生「ハテ是ハいゝ知ゑサト見来が拾媚
汎殺お耶殺いを出「私がお的をして差ハ
ゝせう「ヲゝ」する私ちとが宜らう殺と気ぐり的へ

髭と知ゝう人中の人係烏吉髭と云て女と利せ
るのゝ仏の報いゝ語報ごゝらう。自已中金解むゝゝ
ちゝ報おゑゆゞ狂で方言を稚く考へて死杜撰
本殺を対て見るけまゝと見だゝうゝ知フ分ら私へ
入ゝれお世話サ。仏の報ごゝ本坊又て斗で吉佐と殺
で中法ゝゝゝてお耶殺本中取て老る今日ハ中
本を変るゞ自已中モウ年が老て気が衆俗本
ゑゝとゝう仏で中ん死い後サ。この面ゑゝゞ仏の方へ向人中

性質が正直なるく〻て殺ぶ伸びりまるやうぢアノ文右
衛門つとの人男性が通り者ぢやアあるが一体性質が
極悪い悪くやぐマア偏屈とう人相が風ぢう聳養
子の名ぢやさて何とうく従容移べそとまとお情めが
妹と遠つて生まと損なつてナ。年の性格へ時分ア殺
相ぢやかうつてが四年半方へ〻んくと悪い根性不
あつて来て「ナニ左相ぢやぢうませんが成らど近
曾い位気象が千遠つてうとまんせ。吏とやすう

おーてや。四不足いあ旦那とやぶん。殺ぢうのうのお方。中き
バ天窓の推人ぢうく。何も悪いやの位気の通り不あるのが
実ハお毒ぢ。四気性ふやもうりませう。傷寒的ふお性
質ぢうく四姉妹いぢう生せん「イヤ鳥吉左相りハ。
自己ぢたのの親孝人。あつてのぢう女ぢ。三従の名が
あつて。子ふさ〻後ぢいあやアあくれりの吏をあの西ろ
の家性ぢやア。未相後が学ぶ来ぬ。モシ気ふりくね
とが乃ぢうう。嫁ぢンぢア。の相ふ。扱ふうも知をやア

きるまい。如何繁盛すること若るい婦を笑ふまいと
びく〳〵あるうち。時日丁度對坐のうち。長〳〵美見
をしてゐる。指先の方は遠くこぼれて。口答へをして居るこゝ
ぢ。隣の和うかゝ云て笑せうと。あゝ〳〵胸が分解と
きうだ。見うち見を見まうとまづ承知して指
なぶる。何事を指りけば宮ト笑て何ぢうと気が分かり。
若は事いが婦を見あて「そうやア何指るゝみ
ないと見見を。まをつゝとでぐらまた。モシまゝお耶蘇の

ゝ
ゐるホンとを。云作いあるうちせんう「ナニお耶蘇のゝて
云てゐる隣が。云ゆ考るいが隣指の中のゝる。見云て
笑せうこのサ「ハテゝゝやアトロの中遠或ゝゝゝ新を見
ゝ「何故手指赤新をゝる。何ゆ自己が跡ゝの。害
ゐるゝゝゝゝゝ云新〳〵。婦いい自分が義の児ゝ。行可
まゝぐらて考るゝのぐ。彼ゆまゝゝ人のゐぐゝの親ゝの分ホ
成て。何考ゝゝ笑べ何指ホ婦ゝゝゝ。何たゆゝホ立。
入い下を加るゝ分の勢ゆ。云始まゝぐ遠ひるゝど

と。孫ハ限りなき侍女婢女ゆ。うんみ下ハ立ものどうう
ときを云て咲せこのサ「左指ゆう宮どぐいまゆグト
ゆどゆ由ゆう海ね新。形うう猪ゆが出来うう。酒
坊の女が持運べば「丈ゆ分手つゆがとまてこっけっ。サアく
酒を飲新く人ゆ。まゆく お服を食ゆ宮。モウ服ゆど時
別ゆ知て。お耶新由服ゆ空てうう。ゆ分ハ接いゆ
早く猪ナ「ハイ あるゆうごぐいまゆたお祖父さん由百
あゆうまゆう「イヤく 吾病い モウ一至。服でううのことに
せう。新ゆ帝と字を帝ハ由。猪させて巻みせュ字「
ハイくト成てゆる「イヤ 私ハ手盛ゆ大好。うまゆハ謀ハ
悼ゆさ衣「史ゆう新ハ手盛ゆて。四角出ハ由ハ
ゆうョ。サア 巻帝ハ百ゆうう「モウ 大きハ空猪ゆ。
左指ゆう お祖父さん「ヨイく 中ゆく食ゆグ宮ト見
玄糸ハ鳥 告を対ゆハ。美ゆハ服ゆど 猪ハの
巻ゆうゆ。新ゆく此方ハ服食ゆ仕ゆ。見糸
由ゆ史辞ゆう。猪ハを水ゆて服ハ ゆうまゆ。お耶

墓に手のもと戻て
覚えず
人々を
酒楼よ
いざなう人

雛ハ汁の熱きを吹く傍に居て給仕する鳥吉
は翁より米代帝が何ぞ苦労な難つきの。目ふはかりほど
覚え来の尉身をきまでが給方すく。見通しするが
とる時に。また猪口に収まりて。飯とある所よきわと。
此すへ身を修せ学びて「鳥えん何ぞろおつた中ま訓来節
は海ぬお雛つき。何のゑてござりますぞ「十二他のゑての
雛へお祖父さんが慈母さんによく異見きこその口
し。実はみなござりいづけもど。縁て学ぶき念ての通り。

何れ由淺漢気象でござりやす。お祖父さんが実身の異見を
よくお聞き遊ばしや。庭が悪くくらべその尻がハッあまり小
何処への奉まらて主人が香暈で自己一個の時で
世之なお趣に買まじめこが。お耶雛が来てくるは
別ての上何んに雛て由しく遠に通ってるはお雛へとりよ
のど夏ね彼見りてきくは女房に老執や不実する
由雛淵サ。ちまて由マア云まる斗ちハ我慢して居やうけれ
ど左抱まりやう治まった収まりて雛へきまは出きよう対文

不孝方々と書て居る左様して嫁を出して又不孝せし
やうなものかと科も移へ老爺のことまで世間の人不悪
くいはせるゲ様不苦しい為へば馬鹿ものとこそ今さら
後悔先不立ぢと考えきれの者の思ふ仮令老爺
ゲ物こいそとと止不きるる方ゲ宜っと実不自己の国のまる
せ苦しい様不ことを必せアセア。老年不苦労をうけて
善の物ゆえ為ゲ親父さん不後しう成の姫ものこと
ハ移へけまと隠きるうち移へまへうと思う喰の為ろ

物相して知って居不ざるう自己ゲ為人不笑も弟
ゲ。その時分遠の居て居ろう脇まうつてお親父さん
不その影しを考ヒンどらう「左様サ若旦那のお寿
通ゲ。文不遠ひとぞうません。お情さみも除まりごろう。
旦那不歳しく四夫月をおさせやきうと存まして」
ゲ文ゲ世不の人員員の引倒しとの人りんど夫見
位で治まり史ゲ。結構不様ぐけまどトいゆ〳〵塞げ
べ鳥吉も苗怒「〳〵ものゲ悪うこぞうまうゲ。物相う

まこと私ごとの智恵嚢を絞ひまをう「左相」何う
就向うあるあらぶるぞ波風うく来ル工「サワ〳〵モウ出
みやうぜ鳥吉、まぐ服おう。フレ宮本舞踊仕まし「鳥
イヤ私い四海を載くと四猫い一向落らません。モウ
五あらう今亜でも一「左相」うう一猫食ちう空らう酒を
うぢ史ア能あるめエ「イエナニ見ぐ私の持まへ。食さま
空こぐいまたうト下へ弦をまと排ひまして其の日の暮
養ふ為く帰る。かて鳥吉いその秋さう。森もせで猫く

若へて。見ぐ。ふ思按もの。然うぐう食さまぐ所
ホさへこぐてう移ぐ。まづ面倒もあの居猫史あい形と胸を
究め。家ホ見玄来ホ呑ゑるホ見玄来い孫の可
笑さ。何卒乗く言さうく。実伝ぐく承知さるホつき。
まく兼ゑ邪ホもの。ものを。妻くいホ若ゑ邪いこと
十分の就向あらねど。若左相あらば一蓋遁まと。ふ人
ホうく承知さる。ホ就く見玄来い丈ち来つ史帰ホ
うち対ひ一体この〳〵大勢の来つて。長くの四死命。

明日の事を考へて、夫の物を拾ひ集める。他の日のこの
老婆の。初めての通り七十二歳。気力もぶん〳〵弱るが
為て。傍で使ふ者公人の。あるべき親族がまだ
て仏詣に。修行者の来るが。庵室処で寂坊主婦
を。妻が備へて下さるれば。彼の者に住のこの坊方が居
て居るのでの。若落物が多いの。書物が方でい
祇園堂に。両個が傍が居て。百姓の軍物を。
一度が得さるる物で。年が老て。第の気後もして

若の。子法に大きが遠へ。何卒に教へ中とい
祇園堂で丈夫の。いさみ左指の。あるうと。多く傍
うち出情が口物。七日夫アが成で居住で差間いの
四つ。若指さるるる物アが耶物が屋へ。くれ行
せるるる。まで世間ぐい邪魔して。猫と部へ逃
ひ猫。こと。いまるの音傍い辞。ぶまして影し
合て。逃るる云てあげ世ると一度が入被せて。若
云者い仏程が。猫い立ぶの彼若と。第ふとの情明び

とまづ左の考へを止めけり

第三十六回

前有び烏吉ゞ森の中にて。考へこうじ叛向さへまづ
続ふ有り果て。化ふ為るべき手術なく。光玄来日その
明る日。伯引連て帰り中くお耶嬢との六七日逗留
客のある中。お情い方事優くして。怨嫌くなのこと
あるべ。彩ふい更ふ愛とのし。然るべく祖父さんの帰りし嫁
いいるうんとさと一層の苦を味て落ち水を飛びく安き

仏もあるべきけり。一日お情い来に帰とお耶嬢を伴
へ呼りけて「さて今月へお方の。子涙を病ろうと
らとあのく呼ぶのべきう。毒を意せべ不板一志の接拶と
表示せへ。まう第一歩さいい。ふ不嫁を要といのの。先祖
の血脈を絶され者。実と一ゆく祝ハぶんく。年をとって病
くなる。第十八長子史嫁ふ。今祖さまて死水を取て
貴人ハ表慈。そもを三里由又里由離まて。意くふ不
看て仏ふうらう。その時由祖父さんが滞いうう両個と由。

自分が方へ連て往くといふ人も人だが。世するといへば
牛蒡などぞ尾を振て。往く積りだ。何程も音曲
おやアお解りかい。まお方がこの馬るのが何故舌揃の稀
あのご嶋に鄭へ生まれさへ家で丈なと辞でもあるまいが。
お耶觥へ何う商店ごとらまさ吾俯が遠慮よう。気
になるるいかがあつて家人を勧め立るのでもなく恥さる
との悪徳雄ぜが。その気になつて祖父さんに内証を
吹せて理屈らしく。そうして豚を引てくる。ホンこく呆を

おくるトさも憎く気くに罵るを。嶋に鄭へさそられ俳「イヤ
慈母さんそ達へ者懐の不脳あぶく邪推といふもの思へ人
存稽でへござりません。切腹今まで御通りと。親の介抱へ
子の役目。そうも不遠あへござりませんが。老爺さんおの
老懐あのうまで孫や子の介抱に、お成るさるお年で
あり。お祖父さんは七十を。二つ越てお在なさるから。此
自分でも燈が月の母も知らぬと此御介なとも支故に私
ども。倭不逞とこの言搭列に私理といふべきの身

でゆごさいますまい。然し、徒らと迷惑をかけ。見苦しき
ばかりでございませんが。私どもが同様に。お祖父さんが云ふこと。
思ひ出さぬ大遠ひ。殊ふこのお耶麻が口癖に愛ふ居る
のを辞の意のこと。そこをば変ふゆごさいませんこと。若き
些処が辞さしやせば。皇へ返しまんかのこと。何ぞ私が見
るべきとうて。更りとでゆごさいません「まあ」まあうんふ邪推
うノウ。更るうをとふかりておうが。仮令悪ふ女でも。おお
る方ふ競べちやア。二三十年先へ生まれて。張り甲斐ふ知つてる

老婆さんその位をとを鄙蕩して。世渡りが出来ずに。然し
おのいふの母居れば。成りと吾儕居い年に取てもまだ老枝と
といへばちやアるべい。お祖父さんい七十を。紙て居て一個ど人細い
と云ふ作るう。吾儕が陶綾へ行て居ずうの。居相まつ。お祖父
さんの孫ようとが居るうう。粉屋らう。そこのお耶麻るぞア。
吾儕世へ居るのいけうやア。朝寝をせうぶ怠ずうぶ。天下ののお
嫁さん。陶綾へ行こうう。乗せ。此者ふ。お祖父さんが何と云ふ
さるうこと。へべ。嫁いるのう。母者を見て。嫁を取てい。ーで。我

仏ぞ知る所まことの孫と拾い格別不中ようく永久の人と申
なの。孫の法義い有不一ようけて。なるこけ代不知ようせるなのと。
唐天竺ようく渡りて来こ拾しい物の中ら不一ロ雑不孫ようこ。ホ二
可候ようてなのうなんぞ。夫日宣が仏の故を拾ら不孫ようこ。ようこ
ようこの年、仏の拾ようこ。吾俳を鬼ら蛇の中ら不。諸ようこ
があるこ。年老の一徹で。夫拾云るなるら遠ひるい夫申矢張
まいお方。両個の口ら出ようこ。吾俳いなるんが邪推ら者ん。
志ようこ。夫拾でなるくいて。遠ら不拾でなるお親父人が仏申知ら

吹申ら。吾俳と申ら耶物と中ら者ら。悪いで仏拾して知ら。
仏法今日が前まで中が悪いこ。ようこ。ようこ。夫ら
ら底意地が悪いこ。まこ朝晩不いでなるこ。ようこ。ようこ。
ようこ。ようこ。ようこ中が悪いこ。人申寄して中人ようこ
ら。ようこ。ようこ。ようこ。ようこ。ようこ。ようこ。ようこ。
ようこ。ようこ。ようこ。ようこ。ようこ。ようこ。ようこ。ようこ。

得心切にするにも。さぞ先生の猿が天遠ひ。もう〳〵是非ともつかふと
申。云ふたハ。それ程云ひとおせハ此上ハ陶後へ往くすかハ。老爺さん
へ申よくやって。此指揮次第にいたしませうト。煙草輪にかりて併
頃。西鶴より。お耶教ハ両の瞼に流をもちをして俯き在しが袂
作のどのまでなり。言て居べきとなる。私が儒絆の雅出て
眼をお拭ひ「私ハ老僕の慈を他にましてこちらへ。
切備陶後のおハ親父さまも今回指をて目にかけて史所
でござりませんが。一向おかりませんが俯申お気に叶ひますまいど

ござりますもの出ほ恩を抱まして何申かも何卒今までの事を
不孝おいたし下さりませト云ふ事に扱お小付も申女児気のの
実に孫ハ生て申すものを返辞申せん。ぞおさく眼でつんる
あの果てにおけ見て孫也。御胸にし沈めてお嬉に対ひ「
何時までや申て居ても。食翁なりの云ふ叔てお咋ふまりまでござ
あいし先私ハ引取ませう陶後のまへ何まてもすぐ気にお
さりまし。私くも老翁さんへその叔をよく申ませうト立に
かかるを押止て「おお方の悵をまつ泣くもして云て

おまん
孫兵衛
お吉
丈吉
丈吉兄
伊佐衛門
娘に
挿花を
教ける

おくの事。支度がでけんで。一向緒がうろうろするわい「ト宗
義どの不首尾で。口そ洗ぐさいまするも。此頃でお耶輔ハ去人
家へまゐつても。ふさいでばかり居まする。縦令何様に首尾が宜い事
おいらせも出しました。よまいものでもござりまへん。夫斗ハ
御免なさい。サアお耶輔も一所に来ませ「ト座敷に入て先立出る
お情ハ忍入て置まして。半おハ悪てお出でも黒仏山おかまひ
しやる鉄のこの子由おかげて。佐舞ハ残り多けれど。胸の
あらけ中入放しおしハ後の遠ざかる。此お耶輔ハつら金へ

帰るより。胸さき強く痛むゆゑ。お杉ハ蒲団をとつて出
させ。其まゝ臥て呻吟声。お杉ハ驚き鮑への薬を服せ将
中を摩て。介抱するにぞ。居も寄も。枕元に詰て「ト」つまる
生へ去たる立らを。腹が発つたのであろう。ナニサ。当世様
の人ハ男へ畢竟彼これと波風ハないならしておまへさへとそんな
余りに気が短すぎるのだ。まづ此方ハ中ゝ詮方があるまいし。早く
気分を落付せなされ。大船に乗た気で。旅立で体をいとふ
せエ一バイあくがる事でござりまする。母さんの為がゞつくりと

理由聞て居ませうが。実不幸なことと。彼相
手作て私に先帝のおへの日お気の毒で。泣ませんと存
ふ。胸がきやくいてて来て。ともぶ大ぶ人のいて。積と思ふ
やぐらいませう。イヤ〻〻形お形やとて。を肩く推てたこと
一ナニ今お枝ぶるぐらうが。計遠て日呼ぶ者ナニ
きつのいるいねへのサ。慈の猿をよく解てモウ一杯呑して老
お。自己い者波光爺の方へ見非者ア女ア可悪ト
嫌いふかるども。陶後のこいお情よう。先へ廻りて俗流
れぶ。場合のあまきこと。そんぶ者人ぶ。形うう
丈を思ひい花を挿。侍伯の帝を呼で教ふるぐらぶ文と
ア人ちてお形お蓮の。両個さへ来てもぶ。番伯爺ハ序ア
しこ。おりへど迎さべまうぶ。金処ぶあるて程をちうこと。
いまんこさまどかるへま。ア有うう日ア思ふ。丈ちちい
で侍伯の爺ふ。ふく治させんと枝ぶうを。自分撓て形
ううこ。指揮ぶ石日あるぬをめて。番伯爺日ちあ多際
を賛成さうぶ小歌ぶ。番伯爺ちち祝ア「この

お咒い物の対機ハ無用でござりますヨ。ひ位ニ回ゝこ二回
暑をお治ハすつてゞ。アレ四流ゞ梅猴の猿みゝゞア。ゞ
ゝ指ハ宜ぎ丸アゞざいません。更ハ且物ゞ朝ハ晩ハ。織つ
てお数へハさるゝゝ。ゞ指ゝ日ゝ丸ゝの丹ゝゝト自猴
の口後。ゞ丸ゝ選ゝハ清て箱ゞ方ハ。果くゝみ
庵を切ゝゝませんゝハ。ハ寄ゞ。ゞ物ゝとハ
えゝるゞ。後の紫ゝゝとゞりハけゝ

嵯峨、迺假寐巻之十八終